
三/年/目2 雨上がりの風に向かって

山本哲也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三ノ年ノ目2 雨上がりの風に向かって

【Nコード】

N6442I

【作者名】

山本哲也

【あらすじ】

雨がきつかけで昔の恋人、中村隆士と再会した瑞貴は、強引な隆士に引つ張り回され、昔を思い出す。しかし、その姿は匠に見られてしまっていた。その後ささいな事から始まった匠と瑞貴の喧嘩は予想もしない方向へ発展する…。『三ノ年ノ目』の続編。

始まりは、雨。（前書き）

『三ノ年／目』の続編です。まだ読まれていない方は『三ノ年／目』からどうぞ。
全17話です。

始まりは、雨。

外は、雨が降っていた。

溜息をつき、鞆から折り畳み傘を取り出すと、瑞貴は憂鬱みずき ゆうつそうに空を見上げる。

(…雨は嫌いだな…)

掃除当番で少し遅くなっていたので下校時刻のピークがすぎたのか、昇降口に佇たたずむ瑞貴の周りには誰もいない。

瑞貴は手にしている茶色地にチェック柄の折り畳み傘を見つめた。その表情は相変わらず憂鬱そうだ。

『どうしたんだよ、傘ねえのか?』

五限と六限の間の休み時間に、とうとう雨の降り出した鉛色の空を見上げ溜息をついた瑞貴に気が付き、そう尋ねてきた匠の事が頭をよぎる。

「俺、学校に傘置いてあるの忘れてて、一本余ってるから使えば?」
そう言いながら匠は鞆の中から紺の折り畳み傘を取り出す。

「ん、ううん、傘は持ってるんだ、ほら」

瑞貴はあわてて鞆から折り畳み傘を取り出し、ぎこちない笑顔を作ってみせた。

「じゃ、どうした…」

「匠い、そーいう時の女の子には何も訊かないってのが礼儀だぜ?」
いきなり話に割って入った弘樹が、匠の頭にヘッドロックをする。

「んが! 止めろって、おい…」

「な、渡瀬?」

ヘッドロックから逃れようともがいている匠を無視して、弘樹が意味ありげに笑ってみせた。

「は、はあ」

どういう意味があるのか図はかりかねたが瑞貴は調子を合わせてしま
う。

「ま、あんましひどいようなら、これを…」

匠の頭を片腕で抱えたまま、弘樹はそう耳打ちをして制服のポケットから小さな銀色の包みを取り出し、瑞貴に手渡した。

「？」

「アスピリン」

キョトンとした顔の瑞貴に弘樹が言う。

「…」

弘樹の笑顔の意味が理解できた瑞貴の頬が桜色に染まる。弘樹があの笑顔を見せる時は大抵口くさな事がないが、これはひどい勘違いだ。

「あ」

ヘッドロックからようやく脱出した匠が、瑞貴が手に持っている物が何か理解したらしく、顔を赤く染めた。

「じゃ、俺はこれで。匠、あんまし無粋な真似すんなよ」

そう言いながら片手を挙げて二人に挨拶すると、弘樹はふらふらと教室から出ていく。

瑞貴は手に持っている物を見つめてまた溜息をついた。

「…ゴ、ゴメン。俺…」

「違うわよ」

気まずそうに謝る匠を柔らかく制すと、瑞貴はその包みを匠に手渡し、立ち上がる。

「これ、弘樹君に返しといてね。別に、何でもないから。そういうのでもないし」

「瑞貴…」

「ホントだって」

匠に微笑んで見せると、瑞貴は歩き出し、二、三歩行った所で何かを思いだしたように振り返った。

「ついでに、何でそんな物持ってるのか訊きいてね。弘樹君はいっつ？ って」

悪戯いたずらっぽく微笑んでそう言うと、キョトンとした顔の匠を残し、

瑞貴は教室を出た。別に、どこかへ行く用があるわけでも、行くあてがあるわけでもなかったのではあるが、一人になりたかったのだ。不意に、冷たい風が吹き、瑞貴を現実に取り戻す。

（…雨…か…）

もう一度小さく溜息をつく、傘を広げて降りしきる雨の中を駅へと歩き出した。今日は雨が降る事を予想していたため、自転車ではなく電車で通学していたのだ。

（何で…今頃…）

俯いたままとぼとぼと歩いていく瑞貴は、いつの間にか、再び回想の中に沈んでいた。

再会（前書き）

全
17
話

再会

それは、今朝のことだった。

朝の天気予報で午後から雨が降る、という予報を聞いた瑞貴は、自転車通学を諦め、サラリーマンやOL、制服姿の学生達で込み合うホームで電車が来るのを待っていた。

（…あーあ、混んでるし、たまに痴漢がいるんだよね…この時間…）

憂鬱な気持ちで駅の時計と列車案内を見比べる。あと三分程で電車が来るはずだった。前にも後ろにも、何人もの人が並び、音楽を聴いたり、本や新聞を読んだりとそれぞれの時間を過ごしている。どことなくせわしない空気が辺りを支配していた。

瑞貴は待たされるのも、人混みも、そしてこのせわしない空気も嫌いだった。あまり近いとは言えない学校に、自転車で通っているのはそのためだ。

（早くしてよね…。たくこれだから…）

「間もなく、四番線に…」

ややあって、電車の到着を知らせるアナウンスが流れ、電車がホームに入ってくる。その時の風で瑞貴の長い髪がさらさらと揺れた。（自転車じゃなくてもまとめとくんだった…）

風に舞った髪が顔にかかり、瑞貴はそれをうるさそうに手で直した。

ドアが開き、降りる人たちが一団となって降りていく。瑞貴が利用している駅は乗り換えに利用されることが多いため、かなりの人が降りるのだ。

「瑞貴？」

不意に、後ろから声をかけられ、瑞貴の心臓が鼓動を一回飛ばしてしまう。

（え！？）

それは、懐かしい声だった。そして、もう聞くことはないと思っていた声だった。心臓の鼓動がやたらと早くなっているのを感じながら、恐る恐る振り返る。

そこには短めの髪をウェットに仕上げた浅黒い肌の体格の良い若い男が立っていた。男はジーンズにＴシャツという無造作な格好をしているが、決して野暮ったくはない。それなりに洗練された着こなしをしている。

「君、渡瀬瑞貴、だよな？」

男は確認するようにそう尋ねる。まさかとは思ったが、その声にはやはり聞き覚えがあった。

「先輩……？ 中村……隆士先輩……？」

瑞貴は自分の記憶と男の容姿との共通点を探すかのように、男をまじまじと見つめる。

「やつと思い出したか。……久しぶりだな。今から学校？」

「……う……は、はい……」

『うん』と言いそうになった所を、瑞貴は言い直した。胸がきゅつと痛む。もう忘れたと思っていた痛みだ。

「……えらく他人行儀だな……」

そう言つて隆士は自嘲気味に笑う。また瑞貴の胸が痛んだ。

「瑞貴、俺……」

なおも何かを言おうとする隆士から逃れるように、瑞貴はそそくさと電車に乗り込む。

電車が走り出してホームから出てしまうまで、瑞貴は隆士の方に背を向けたまま一度も振り返ろうとはしなかった。

「瑞貴」

校門を出ていく所でも行かない所で不意に呼び止められ、瑞貴は現実へと引き戻される。だが、まだ回想の中にいるような気分だった。呼んだのが他でもない隆士だったのだ。

「……どうして……」

驚いた瑞貴はそれだけ言うのが精一杯だった。隆士はまたあの自

嘲気味な笑顔を見せ、瑞貴の前に立つ。

「その制服ならどこの学校かすぐにわかるさ。地元だからな」

「どう…したの…？」

ぎこちなく答える瑞貴に、隆士は肩をすくめてみせる。

「ご挨拶だな。久しぶりの再会なのに」

「…」

瑞貴は顔を逸^そらした。

「さて、と。俺の傘は少々水が漏れてね。そっちに入れてくれよ」

そう言いながら隆士は自分の持っていたビニール傘を畳み、瑞貴のさしている小さな折り畳み傘に入り込む。狭い傘から二人の肩がはみ出し、雨に濡れた。

「ち、ちよつと、定員オーバーよ。肩が濡れちゃうじゃない」

「懐かしいな。昔、こうやって帰っただろ」

隆士は瑞貴の言葉を無視して言う。

「…」

「さ、行こうぜ。駅はこっちだろ」

瑞貴の気持ちなどお構いなしに明るくそう言っていると、隆士はポン、と瑞貴の肩を叩き、歩くように促す。

「…調子がいいのね、相変わらず」

瑞貴はあきらめたように一つ溜息をつく、駅に向かって歩き始めた。

彼

同じ頃、匠と弘樹は雨の中、駅の近くの繁華街を歩いていた。学校の最寄り駅は駅ビルもあり、デパートなどがそれなりに立ち並んでいるため、匠たちは学校帰りに良く寄り道をして行くのだ。

「おい弘樹、まだ行く所あんのかよ」

「まあそうカリカリしなさんなって」

いい加減イライラしている匠の問い掛けに、弘樹は曖昧な笑顔で答える。

何でよりもよって雨の日などにあちこち買い物に回るのかと匠は思う。しかも、弘樹のは所謂ウインドウショッピングというやつで、別に何か目的があつてのことではないらしい。匠は自分もちょうど寄り道をしていく予定があつたので、弘樹の誘いに気軽に応じてしまった自分を後悔していた。

と、不意に前を歩いていた弘樹が匠を連れて飛び込むように近くの物陰に入り込む。

「お、おい！ 何だよ急に！」

「しっ！」

いきなり襟首を掴まれ引つ張り込まれた事に抗議する匠を弘樹は鋭く制した。そして、緊張した面持ちで物陰から歩道を窺う。連られるように匠も物陰から顔を少しだけ出して弘樹の見える方を見た。

「！」

匠は息が詰まる思いがした。瑞貴が、何だかスポーツマン風の男と相合い傘をして歩いていたのだ。

瑞貴達は雨の歩道をこちらに向かって歩いてきている。男の方がしきりに何かを話しかけ、瑞貴は時々少し笑ったりしながらそれに答えていた。

少し寂しげな、何かを懐かしむような切なげな微笑み。

匠はそんな瑞貴の顔を今まで一度も見ることがなかった。

近いと思っていた瑞貴との距離が急に果てしなく遠く感じられる。
胸が、痛い。

『だ、だって、好きでもない奴と友達になんかならないでしょ？
普通』

(…そういうことなのか…?)

以前、花火大会の時に瑞貴が見せたぎこちない笑顔。

あの時の瑞貴の反応にはいくら何でも腑^ふに落ちないものがあつた
のだが、その訳が今、判った気がした。

「おい見てみるよ、あの男、ちゃんと自分で傘持ってやがるぜ」

匠たちに気づかずに通り過ぎていく二人の後ろ姿を見送りながら
弘樹^{うなが}が促すが、その声は匠には届いていなかった。

「…りや？ 匠？」

二人の後ろ姿を見送ったまま固まってしまっている匠の顔の前で
弘樹がブンブンと大きく手を振ってみせる。

(…瑞貴…)

だが、それさえも匠の目には入っていなかった。いつまでも、胸
が締め付けられるように痛い。

駅に着くと、瑞貴は傘を畳んだ。同時に、今まで自分が隆士のペ
ースに乗せられていた事に気が付く。

(…今更…)

瑞貴は微かに溜息をついた。

「どうしたよ」

それを敏感に感じ取った隆士が尋ねる。

「あたし、やっぱり…」

「ストップ。それは言いつこなし」

一息に捲し立てようとする瑞貴の唇に人差し指をあて、隆士が制
した。

「…でも…今更やり直すなんて…」

瑞貴は俯いて、絞り出すようにやつとそれだけ言う。

「やり直す？　続きから始める、の間違いだろ」

「……」

隆士の言葉に、瑞貴は何も言えなかった。

「じゃ、明日、このくらいの時間にここで待ってるぜ」

それだけ言うとな隆士は改札の方へ歩いて行こうとする。

「そんな、勝手に……」

「勝手なのは俺の専売特許だろ。それから、やっぱおまえはその怒った顔の方がいいぜ」

顔を上げて文句を言おうとした瑞貴にウィンクしてそう言つと、隆士はそのまま猫のようにしなやかに人混みを抜け、自動改札をくぐって見えなくなっていくた。

夢

その夜、瑞貴は中学時代の夢を見た。

「先輩、遅ーい」

中学校の昇降口でちよこんと佇んでいたブレザー姿の瑞貴が、やって来た同じ制服姿の隆士に拘すねたように口をとがらせて抗議する。「悪い悪い。ちよつとガミガミ屋の先生に捕まっちゃって」

隆士は笑いながらそう言っつて肩をすくめてみせ、それから外を見続けた。

「おまけに雨まで降ってるとはね、やっぱ今日はついてねえな」

「じゃーん。何とここに傘があるのでした。用意がいいでしょ？」

目をきらきらさせ、悪戯あそつぽく微笑んだ瑞貴はそう言っつて後ろに隠していたクリーム色の傘を隆士に見せる。

「へえ、じゃ、入れてくれるわけ？」

隆士が悪戯あそつぽく微笑んだ。

「うーん、待たせたお詫わびに傘を持ってくれるなら、考えてもいいかな」

瑞貴は腕を組んで小首を傾かしげる。

「オーケー。持たせていただきましょう、お姫様」

笑いながらそう言っつた隆士は瑞貴から傘を受け取る。そして、二人は一つの傘に寄り添っつて雨の中を帰っかっていく。

「…やっぱ、この傘じゃ小さかったかなあ」

暫く歩いたところで瑞貴は傘からはみ出して濡れてしまっている隆士と自分の制服の肩を見て呟つぶく。

「もっとくつつけば大丈夫さ」

そう言っつと、隆士は瑞貴の肩に手を回し、ぐいっつと自分の方に引き寄せた。

「きゃっ」

急に引き寄せられ驚いた瑞貴は小さな悲鳴を上げるが、すぐに笑

顔になって言う。

「もう、先輩、図々しいんだから」

「誉め言葉と受け取っておくよ」

隆士はそう言いながら肩をすくめるような仕草をする。

そこで、瑞貴は夢から目覚めた。

枕許の時計を見ると、まだ一時間ほど余裕がある。普段ならもちろんまた寝てしまうところではあるが、今日はふと気になって洗面所に行つて鏡を見つめた。

寝起きのぼんやりとした顔。よく乾かさないうで寝てしまうので激しい寝癖のついている髪。いつもは時間がないので適当に梳かす程度で不問に付してしまうのだが、あまり人に見せられた姿ではない。（たまにはシャワーでも浴びようかな…時間ももあるし…）

そう思いながら瑞貴は居間の時計を見る。

（…時間があるから…）

暫く時計とにらめっこをしていたが、結局、シャワーを浴びることにした。

「何だよ、傘ささないで来たのか？」

席に着いた瑞貴を見て、匠が怪訝けげんそうにそう尋ねる。

「え？ ど、どして？」

何でそんなことを訊くのだろうかと不思議に思い、瑞貴は訊き返した。

「髪がしめってるぜ」

匠が瑞貴の髪を指さしてそう答える。瑞貴ははつとした。朝、シャワーを浴びてきたので髪がちゃんと乾いていなかったのだ。

「…朝、シャワー浴びたんだよ」

匠がどんな反応をするか予想がついていたのと、どうしてそんなことをする気になったのかが嫌になるほど分かっていたので瑞貴は決まり悪そうに答えた。今日に限ってどうしてそんな事をしたのだろう。やはり、しなければ良かったと瑞貴は思った。

匠は暫く信じられない、と言うような顔をしていたが、やがて、
「ふうん……」

とだけ言つとそっぽを向いた。きつと『それで今日は雨なのか』
などと言われると思つていた瑞貴は少し拍子抜けする思いだった。
その日の匠は何故かよそよそしいように瑞貴には思えた。

夢（後書き）

全
17
話

デート？

そして、放課後。

昨日、強引に約束させられた場所に行くと、隆士はちゃんと待っていた。

「よう、来たな」

瑞貴を見つけた隆士が片手を挙げて近づいてくる。

「そっちが無理に約束させたんでしょ」

呆れ顔で瑞貴は答えた。

「手厳しいね。ま、退屈はさせませんって」

苦笑いしながら隆士が言う。

「で、どこか行きたい所がありますか？ 我が儘わままなお姫様？」
胸に手を当てて恭しく言う隆士に、思わず瑞貴は吹き出してしま
う。

「ホント、変わんないのね」

「誉め言葉と、受け取っておくよ」

そう言いながら隆士はウインクして見せた。

それから暫く後、あちこちぶらぶら見て回った二人は喫茶店でコーヒーを飲んでいた。隆士は昔以上におどけていて、笑いすぎた瑞貴は少し疲れてしまったほどだ。

「いや、瑞貴とデートするなんて、久しぶりだよな」

湯気の立つ白いコーヒークップを片手に、何気なく隆士が言った。

（デート…）

その言葉が、ふと、瑞貴の心に引っかかった。

「どした？ 瑞貴」

そんな瑞貴の様子に気づき、隆士がキョトンとした顔をする。

「う、ううん、何でも」

瑞貴は慌てて誤魔化し、コーヒーを一気におおる。

「あ、おい…」

隆士が何かを言おうとしたが間に合わず、熱い液体が瑞貴の口の中と喉を焼く。

「……！」

「……あほ」

慌ててコップの水を飲み干す瑞貴を、呆れた様子の隆士が見つめ、笑う。だが、瑞貴は暫く抗議すらする余裕がなかった。

「じゃーな。お大事に」

ウインクして電車を降りていく隆士の背中を瑞貴は無言で見送る。隆士は瑞貴より少し手前の駅を利用しているのだ。

（これで……いいの……？）

電車が走り出すと、瑞貴はそつと目を伏せ、そう自問する。心の中では、再び『デート』と言う言葉が引っかかっていた。

確かに、隆士と一緒にいて楽しかった。昔に戻ったような気さえたのだ。しかし、それでいいのだろうか。また、昔のようになるのではないだろうか……。

瑞貴は、あの日以来、『友達』ではなく『恋人』として誰かと付き合う勇気を失くしたままにいる自分の事を、分かっていた。

ふと気が付くと、電車の窓に雨粒が幾筋もついている。また、雨が降り出していた。

翌日もまた、雨だった。

（今日は……早く帰る……）

昼休み、自分の机に突っ伏して瑞貴はそう思っていた。

どうしても、『デート』という言葉が瑞貴の心に刺さったまま抜けなかった。少し、心の中を整理してみたい、とも思う。

（ずるいよね……）

瑞貴は自己嫌悪に陥っていた。

「……はあ……」

「どうしたの？ 瑞貴」

知らず知らずのうちにしていた溜息に気が付き、近くを通りかかった友達の齊藤^{さいとう}珠美^{たまみ}が声をかけてくる。小柄だがショートカットのよく似合う珠美は活動的で男勝りな所があるのだが、ちょっとお節介でもある。

「ん…何でもないよ。ちょっと、慣れない電車通いしたら疲れちゃって…」

けだるそうにゆっくりと体を起こし、ぎこちない笑みを浮かべながら瑞貴は答えた。

「ここん所はつきりしない天気が続いてるもんね。何かこう、みんな鬱々《うつうつ》とした顔してる。かく言っあたしもだけど」

そう言っ珠美は悪戯っぽく笑う。

「あ、所で、匠君の仲間の腐れ外道、どこ行ってるか知らない？」

珠美はそう言いながら瑞貴の左隣の机、つまり匠の机をトントンと叩く。珠美は弘樹のことを嫌っていて、滅多に名前では呼ばずにいつも『腐れ外道』だとか『女の敵』などと言っのだ。

「弘樹君？」

「そう。あいつ、今日の日直のくせに、あたしに全部押しつけてどこか行っちゃって。ったく…」

それから、耳打ちするように身を乗り出し、付け加える。

「そう言えば今日は瑞貴のオプシヨンの姿もあんまり見かけないよね」

瑞貴のオプシヨンというのはもちろん匠のことだ。珠美は時々そう言って瑞貴をからかうのだ。

「…止めてよ、その言い方」

疲れたように瑞貴は言った。

「ゴメン。でもさあ、匠くんって…」

「止めてっば！ あたし、そんな風に見られたくない！ 別に匠なんてどうだっていいんだから！…」

ニヤニヤと笑いながら耳打ちするように話しかけてくる珠美を鋭く遮ると、パンツと立ち上がった瑞貴はそう一息に捲し立てる。そ

の剣幕に驚いたのか、珠美はぎょつとしたような顔をする。瑞貴は自分が珠美に八つ当たりしていたことに気が付き、はっとした。

「あ、ご、ゴメン、あたし…」

だが、珠美がぎょつとしたような顔をしたのには別の訳があった。匠が、無言で自分の席に座ったのだ。

キーーンコーンカーンコーン…。

最後の授業の鐘が鳴り出していた。

デート？（後書き）

全
17
話

すれ違うココロ

『あの男の正体、判ったぜ』

匠はさっきの休み時間に弘樹がそう言ったのを思い出していた。

弘樹は無理矢理に匠を購買への買い物に付き合わせ、その道すがらそう切り出したのだ。どうやら、購買への買い物というのはただ匠を教室から連れ出す口実だったらしく、暫く歩いた所で弘樹は立ち止まった。

「き、興味ないよ」

そう言うつと匠はまた歩き始める。

「まあそう言うなって。あの男、どうやら渡瀬の中学の時の先輩らしい。中村隆士、今は大学生らしいな」

スタスタと早足で歩く匠に追いつき、耳打ちするように弘樹は言う。

「…で？」

「…それだけだけど。…興味ないんじゃないのか？」

歩きながら先を促す匠に、弘樹が呆れたような声で答えた。

「…無いよ」

俯いて呟くように答える匠に、弘樹は大げさに肩をすくめて見せる。

「ウジウジするくらいなら、いつそスパッと言えばいいだろ。『瑞

貴、好きだ』って」

「…言ったよ」

拗ねたように呟く匠。

「この前のアレ、か？」

弘樹が馬鹿にするように匠を見た。

「誤解されたんだろ？　って事は言っていないのと同じじゃん」

「でも…」

「瑞貴には他に男が、か」

匠が心のどこかで感じたまま、言葉にしていなかった事を、弘樹が先に言う。匠ははっとして弘樹の顔を見た。

「まだそうと決まった訳じゃないんだろ。それに…」

弘樹は言葉を探すように一瞬口をつぐむ。それから、今度は妙におどけて続けた。

「例えそうだったとしても、言わないより、言ってしまった方がい
いぜ。言わないまま終わらせると、いつまでも未練が残るからな」

「…経験済みって訳か」

匠の言葉に、弘樹は大げさに肩をすくめてみせた。

「さあね。ま、後はお前さん次第、好きにやんな」

「…つまり、この頂点に対する…」

気が付くと、初老の先生が黒板に図を書きながら何かを説明して
いる。匠はなるべくそのことを思い出すまいと、カリカリと普段は
口クに取りはしない板書を取る。

『だ、だって、好きでもない奴と友達になんかならないでしょ？

普通』

そう言った瑞貴の顔がふっと頭をよぎり、ぽきりと音を立ててシ
ヤープペンの芯が折れる。匠は微かに溜息をつく、カチカチと芯
を出し、再び板書に没頭しようと試みた。

（…参ったなあ…）

瑞貴は匠の姿をちらりと盗み見る。匠はまるで自分の席の右側は
壁だ、とでも言うように、瑞貴の方を一顧だにせず、黒板を睨み付
けている。珠美との会話を匠に聞かれていたのは明白だし、匠が怒
っているのもまた、明らかだった。

（…どうだっていい、は言い過ぎだよ…謝らなきゃ…）

そうこうしている内に、授業が終わる。

「匠…」

学級委員の号令で挨拶をしてから、帰り支度を始める匠に瑞貴は
そう切り出した。

「…」

匠は無言で顔をわずかに向けただけだった。その冷たい視線に、瑞貴はカッとする。

「…何怒ってんのよ」

謝ろうと思つて開いた口から出た言葉は全く違うものになっていた。

「別に」

短くそう答えると、匠はぷいっとな顔を逸らし、また帰り支度を始める。

「大人げないよ、匠。あのくらい…」

「大人げなくて悪かったな。そりゃ俺はおまえの先輩じゃないからな」

売り言葉に買い言葉でつい匠はそう口にしてしまう。言ってからしまったと思つたが、もう手遅れだった。

「！？ …匠…見てたのね！」

「あ、い、いや…」

「匠なんて大っ嫌い！！ 顔も見たくない！！」
パッシーン！

派手な音と共に瑞貴の平手打ちが匠の頬を襲った。そして、瑞貴はそのまま鞆を持つて駆け出していく。後には呆氣に取られた匠やその他の生徒達が残されていた。

外では、雨がぼつりぼつりと降り始めている…。

空回りする想い

瑞貴の平手打ちによって凍り付いた空気からようやく醒め始めた教室に残っていた生徒達の内、好奇心に勝てなかった何人かは、崇りを恐れるようにちらちらと匠の方を見ていた。それ以外の者はいたたまれないのか、用を済ませるとそそくさと教室から出ていつている。珠美は前者の方だった。

匠はまるで『呆然』というタイトルの彫像にでもなってしまったかのように、いつまでも立ちつくしている。

(…やっぱ…もしかしてあたしのせい…?)

立ちつくす匠を見つめ、珠美は罪の意識にさいなまれていた。元はと言えば自分が余計なことを言わなければ…。

(…あの二人が喧嘩するなんて…)

なぜだか珠美は自分の事のように悲しく思えてくる。

「さて、と」

そう言つて弘樹が立ち上がり、教室を出て行くこととするのが珠美の目に入った。

「あんたのせいよっ!! この腐れ外道!!」

廊下に出た所で弘樹に追いついた珠美はそう言いながらぽかぽかと弘樹を叩く。弘樹は何のことだか分からないようだ。

「いてて! おい、何すんだよ!」

「あんたがちゃんと日直の仕事しないから瑞貴が喧嘩するんじゃない! 責任取れ!」

ぽかぽかと弘樹を叩きながら珠美は涙ぐんでいた。

「はあ!?! どういう関係があるんだよ!」

「あんたが…」

「止めてくれよ!」

弘樹を叩き続ける珠美を制したのは、匠の鋭い声だった。

「匠君…」

いつの間に来たのか、匠は珠美達のすぐ後ろに来ていた。多分、珠美の声を聞きつけたのだろう。

「止めてくれよ。別に…何でもないから…」

俯いた匠は暗い声で絞り出すように言う。その右手が強く握られていることに、珠美は気が付いていた。

「でも…」

何かを言いかけた珠美の肩を弘樹がポン、と叩く。『止める』と言う意味だ。

俯いたままふらふらと教室へ戻っていく匠を、珠美は無言で見送る。寂しげなその横顔はまるで泣いているようだった。

「…どうするつもり、腐れ外道」

匠が行ってしまうと、珠美は小声で後ろに立っている弘樹に尋ねる。

だが、弘樹からの返事はなかった。

「ちよつと？」

訝しく思った珠美が振り返ると、そこには誰もいない。ただ、遙^{はる}か遠くの方を走っていく弘樹の後ろ姿が見えた以外には。

「…あの腐れ外道ーっ!!」

そう叫ぶ珠美の声だけが、廊下に空しく響いていた。

雨に濡れて

(…ひどいよ…匠…)

瑞貴は雨がぽつぽつと降り始めている中を傘もささずに泣きながら走っていた。そんな瑞貴をすれ違う人達が怪訝そうに振り返って見送る。

暫く行った所で瑞貴はようやく立ち止まった。そして、制服の袖^{そで}でぐいと涙を拭うが、その頃には涙は雨と混じってどっちがどっちだか分からなくなっていた。鞆の中をあさると、入れ忘れたのか茶色の折り畳み傘は入っていなかった。

短く舌打ちして、瑞貴はまた走り出す。また通り過ぎる人たちが振り返るが、瑞貴はそれを無視した。とにかく今は何かをしていたかった。何かをすることによって匠の事を忘れたかった。

「どうしたよ、一体？」

濡れながら走ってきた瑞貴を見て、隆士は目を丸くする。

何かを言えば泣き出してしまいそうで、瑞貴は何も答えずにただはあはあと肩で息をしていた。

「…傘、持ってなかったのか」

暫く何かを探るように瑞貴を見つめていた隆士はそう言うど鞆からハンカチを取り出し、瑞貴の顔や髪を拭いていく。

「制服も濡れてるじゃないか。このままじゃ風邪ひくぜ。どっかに

…」

瑞貴の姿を見つめていた隆士がそう言いかけた所で瑞貴はびくつとなる。そんな瑞貴に気づいた隆士はふっと自嘲気味に笑った。

「…風邪ひかないうちに帰れよ、今日は」

瑞貴は、胸の痛みを堪えているような、少し寂しげな顔で隆士を見つめる。

「どうしたんだよ、そんな顔しやがって」

笑いながらそう言うと、隆士はぱしぱしと軽く瑞貴の頬を叩いた。

「何してんだ、風邪ひくだろ。早く帰れよ」

「…うん」

目を伏せて頷いた瑞貴は改札へ向かって歩き出す。

「瑞貴」

不意に、隆士が瑞貴を呼び止めた。俯いたまま、瑞貴が振り返る。

「…いや。何でも」

短めの髪をかき上げて隆士はそう言った。

「…うん…」

瑞貴はくるりときびすを返して歩き出す。

（…あの時は、悪かったよ…）

隆士はその後ろ姿を見送りながら、またふっと自嘲気味に笑っていた。

甦る、過去

翌日、瑞貴は風邪をひいて学校を休んだ。熱が高く出て、元々平熱がそれほど高くないので一発で参ってしまったのだ。

自分の部屋のベットで横になり、ぼんやりと天井を見つめる。熱のせいか、頭がぼーっとしていた。

(…風邪ひいて、学校休むなんて久しぶりだな…)

ぼんやりとそんなことを思う。

この前、風邪で学校を休んだのはいつのことだったろうか。

再び目眩がして、瑞貴は目を閉じる。そして、いつの間にか浅い眠りに落ちていった。

放課後、部活を終え、帰り支度を済ませた瑞貴が昇降口へ行くと、制服姿の男子生徒がしんと雨を落としている鉛色の空を見上げ、悪態をついていた。

「ち…ついてねえな、雨かよ」

(！ 中村先輩…)

瑞貴にはその男子生徒が誰だか直ぐに分かった。隆士だ。瑞貴達より一学年上の隆士は、女子生徒達の人気が高い。瑞貴も、幾度となくその背中を目で追い、あこがれていた者の一人だった。

隆士はこのまま濡れて帰ろうかどうか迷っているようだ。

「先輩…あの、良かったらどうぞ」

暫く隆士の姿を見つめていたが、やがて瑞貴は、恥ずかしそうにクリーム色の傘をさしかける。

「…いいの？」

隆士が少し驚いたような顔で緊張した面もちの瑞貴を見つめる。

「は、はい！」

そう答えた瑞貴の声はうわずっていた。

「でも、方向が一緒なわけ？」

「あ…」

言われてから瑞貴は初めて隆士の家の方など知らないことに思
い当たる。

「で、でもっ！ あたし、大丈夫ですからっ！！」

一息に瑞貴はそう言った。心臓は早鐘のように打っていて、とも
すれば舌がもつれてしまいそうだ。

「じゃ、そのコンビニまで送ってよ。そしたら、傘買えるから。
えっと…君…」

「わ、渡瀬、瑞貴ですっ！」

「さんきゅ。渡瀬さん」

そう言って隆士はにっこりと微笑む。瑞貴は頭が半分ぼーつとし
て、何だか足が地面についていないような気さえた。

瑞貴はそこで浅い眠りから目覚めた。

「…雨なんて…嫌い…」

そう呟いた瑞貴の目にはいつの間にか涙がたまっていた。

ごろりと寝返りを打って枕に顔を埋めた瑞貴の耳に、雨の音が聞
こえてくる。どうやら、外ではまた雨が降り出しているようだった。

不協和音

匠とのがあつたため、瑞貴が学校を休んだ事が投げかけた波紋は意外に大きい。

『喧嘩が原因で寝込んだ』

『病気ではないが匠が謝るまでは学校に来ないつもりだ』

などという他愛のないものから、果ては

『自殺未遂をして入院している』

といった女性週刊誌張りのものまで、クラスには様々な憶測と流言が飛び交っていた。

「…ねえ、知ってる？ …あの二人…」

昼休みになり、囁き声で交わされている会話を、自分の机に頼杖をついて座っていた匠は表面上は無視していた。だが、話に熱が入ってポリウムが上がってしまうのか、時折漏れてくる話の内容や、話し手である女子生徒たちのちらちらと匠を窺う好奇心にあふれた視線で話の大まかなところの予想はついている。

だが、別に面と向かって何か言われたわけではないので反論のしようがないのだ。

（…勝手なことばっか言いやがって…）

何か直接言ってくれば反論してやれるのに、と匠は思っていた。

「ねえ、藤代君…」

さつきまで教室の脇で集まって何かひそひそ話をしていた女子生徒の一人が恐る恐る、まるで猛獣にむかって近づいて行くようにしながらそう声をかけてくる。

「…何？」

匠はきつと顔を上げてその女の子を睨み付けた。いや、匠本人にはそのつもりはなかったのだが、自然とそんな表情になっていたのだった。

「…ご、ごめん、やっぱ、何でもない…」

引きつった笑顔でそう答えると、その女子生徒はそそくさと元いた集団へと帰って行く。その生徒を固唾かたずをのんで見守っていた他の女子生徒達が、一斉に匠の方から視線を逸そらした。

(…まったく…何なんだよ…)

その原因が自分の表情にあるとはつゆほども思わない匠は、その後ろ姿を目で追いながら膨ふくれていた。

「おいおい匠、何て顔してんだ？」

教室へ帰ってきた弘樹が、匠の顔を見るなりニヤけた笑いを浮かべて言う。

「何がだよ」

匠は短くそう答えただけだった。

「あのなあ、八つ当たりは…」

「やっと捕まえたわよ、この腐れ外道!!」

前髪をかき上げながら何かを言おうとした弘樹を、珠美の声が制した。

「げ、斉藤…」

「逃げようだったってそうは行かないわよ」

慌ててくると百八十度進路変更した弘樹の制服の襟えりを掴んで珠美が止める。

「…はは…デ、デートの予約なら今日は先約が…」

「馬鹿言ってるんじゃないわよ! この腐れ外道!!」
パッシーン!

教室に派手な平手打ちの音が響き渡る。

「…あたしはねえ、あんたのそういうふざけた所が許せないの! どうしてもっと真面目になれないのよ!？」

珠美は一息にそう言う、今度は匠の方に向き直る。

「匠君も匠君よ! あのまま瑞貴を放っぱっておくなんて!」

急に矛先が自分に向いてしまった匠は、珠美の剣幕に押されてキョトンとした顔をするだけで何も言えない。

「好きなんですよ!?! 瑞貴の事!」

匠の心臓が鼓動を一回飛ばした。まさか、珠美からそのようなことを言われるとは。

「…い、いきなり、何言ってるんだよ…そんなわけない、だろ…」
胸が痛い。匠の言葉の最後の方は呟くような声になっていた。

「嘘！」

頼りなげな匠の言葉を珠美はたった一言で軽く一蹴する。

「誰でも知ってるわよ！ そんな事！」

匠は目眩に似たものを感じた。匠の瑞貴への想いを知っているのは弘樹だけだと思っていたのだ。珠美にそれを言われた事もショックだったが、『誰でも知ってる』とは…。

「ねえ、喧嘩なんてしないでよ！ そうじゃないとあたし、何も信じられなくなるじゃない！」

そう匠に懇願する珠美は、いつの間にか泣いていた。

「ち、ちよつと…」

いきなりの事に匠は戸惑う。

「あんなに仲が良かったのに…だから、あたしも…」

「ま、待ってくれよ、一体…」

「馬鹿っ！」

立ち上がったなだめようとする匠の手を振り解くと、珠美は走って教室から出て行ってしまった。

「…何ともパワフルだねえ」

前髪をかき上げながら、その後ろ姿を見送った弘樹がそう呟く。

「…なあ…」

惚けたように立ちつくし、俯いたままの匠がぼそりと呟いた。

「ん？」

怪訝そうに弘樹が振り返る。

「…『誰でも知ってる』って…」

思い詰めた様子でそう言いかけた匠を弘樹が呆れたように遮る。

「…つたりめーだろ。もしかして、あれで秘密のつもりだったのか？」

「…」

匠は呆けたように無言のまま椅子にへたり込んだ。

雨降って地固まる？（前書き）

1日に更新するつもりがすっかり忘れてたっス…（汗）。

雨降って地固まる？

「…喧嘩、か…」

夕食後、自分の部屋のベットに寝転がり、天井をぼんやりと見つめながら匠はそう呟いた。今まで匠が喧嘩をする相手と言えば千夏くらいで、男友達とも喧嘩をすることはほとんどなく、まして千夏以外の女の子と喧嘩するというのはおそらく初めての経験だった。

（…やっぱ、謝るべきなのかな…）

確かに、瑞貴が男と一緒に歩いているのを物陰から盗み見ていたのは悪いと思う。しかし、別に後を追けていったわけでもなく、たまたま見かけて何となく物陰に隠れてしまったただだ。大体、学校から駅までの道を男とふらふら歩いている方が悪いのだ。見られたくないならもっと別の所を歩けばいい。

それに、学校での一件はどう考えても瑞貴が悪いように匠には思えた。

（…だったら、向こうから謝ってくるのが筋じゃないか…）

ごろりと匠は寝返りを打つ。

だが、そうこちらが考えているからといって瑞貴の方から謝ってくる可能性は低そうだった。瑞貴はあれで結構頑固なところがあるのだ。

「…先輩、か…」

少し寂しげな、何かを懐かしむような切なげな微笑み。

匠はこの前の瑞貴の表情を思い出す。一体、二人の間には何があるのだろうか。

（…ただの先輩…って感じでもないよな…）

胸が裂けるように、きゅっと痛い。

『例えそうだったとしても、言わないより、言ってしまった方がいいぜ。言わないまま終わらせると、いつまでも未練が残るからな』

匠は昼間の弘樹の言葉を思い出し、溜息をついて体を起こした。

「…何言ってるのよ、バツカじゃない？ そんなんだから…」

冷蔵庫から何か飲み物でも持ってこようと思ひ部屋を出ると、階段の下から千夏の声が聞こえてくる。どうやら、電話をしているようだ。

携帯電話が一人に一台、という御時世にもかかわらず、藤代家にはまだ黒電話が現役で活躍している。父親が何か黒電話に特別な思い入れがあるのか、なかなか買い換えようとしなかったのだ。そのため、電話をかける時は階段のすぐ下に置いてある黒電話の所で話さなければならぬ。それが、千夏の博文の所への長電話に多少の歯止めを効かせている事は確かではあったのだが…。

(…電話、か…)

匠はこの前瑞貴の所に初めて電話した時の事を思い出す。あれから二ヶ月位経つが、もちろん、その後電話などかけてはいない。

「…ったく。あ、そろそろ遅いから切るよ。じゃ、もつとしっかりしてよね」

階段を下りていくと、ちょうど電話が終わった所のようなだった。

漏れ聞こえてくる言葉からして、相変わらず千夏は博文にあれこれ文句を言ったりしているらしい。だが、それとは裏腹に、にこやかな、少し名残惜しそうな微笑みを浮かべて受話器を置いていた。

「…よく毎日飽きもせずに長電話できるな」

「…うっさいわね。どうせお兄ちゃんにはわかんないでしょーよ」

呆れ顔の匠が言つと、千夏はあかんべーをしてそれに答える。だが、その千夏の顔は、はにかんだような、照れくさいようなそんな感じがした。今は、博文との会話の余韻よゐんに浸ひたっているのだろう。

「…なあ…喧嘩の後、どうやって仲直りしたんだ…？」

気が付くと、匠は千夏にそう訊いていた。そして、そう口に出してしまつた自分に、匠自身が驚く。

「…な、何よいきなり…あ、もしかしてお兄ちゃん、喧嘩したんだ？」

最初キョトンとした、少しはにかむような表情をしていた千夏は、何か思い当たったのかすぐに悪戯っぽい微笑みを浮かべ逆に匠に訊いてくる。

「な、なに馬鹿言っただよ。大体俺にはそんな相手なんか…」

そうは言うものの、匠は頬がかーっと熱くなるのを感じていた。きつと、真っ赤な顔をしていることだろう。これでは千夏を誤魔化せるとも思えない。

「その顔で誤魔化したつもり？」

案の定、千夏はまるで信じていない様子でニヤニヤと笑う。

「あたしが特別に相談に乗ってあげるって。で？　どうしたのよ？」

「そ、そんな相手なんかいないって言ってるだろ」

匠は必死の抵抗を試みる。が、それが何の役にも立たないことは匠自身が一番よく分かっていた。

「嘘つくんだったらもう少しマシな嘘をついたら？　…ま、あたしには関係ないから、どうでもいいんだけど」

馬鹿にしたように千夏は肩をすくめてみせる。匠はむっとしたが、普段から立場が弱いので何も言えない。

「でも、クヨクヨしてるくらいなら意地張らずにさっさと謝っちゃったら？　『雨降って地固まる』になるといいけどね」

それだけ言うと、千夏は立ち上がって階段を上っていく。

(…そうは言うけど…)

一人残された匠は頬杖をついて考え込んでいた。このままでは固まる前に土砂崩れを起こしてしまう様な気さえする。

「あ、そうだお兄ちゃん」

階段を上ったところで、千夏が小悪魔的な笑顔で振り返る。

「お兄ちゃんの喧嘩した相手って、瑞貴さんでしょ」

「な…ど、どうして…お前まで…」

かすれた声でそういったきり、匠は絶句してしまう。

「あのね、あれで気がつかない人がいるとすれば、お兄ちゃんぐらいいだよ」

千夏は呆れ顔でそう言った。

それぞれの、空

瑞貴は、その翌日も続けて学校を休んでいた。そのせいか、まずまず匠を見る周りの生徒達の好奇の視線は強くなっている。

痛いほど視線を感じつつも、頬杖ほおづえをついて仏頂面ぶつちやうめんをした匠は教室の自分の席に座っていた。購買や他の所に行つて取り敢えずあその視線から逃れる、という手もあるのだが、それでは何となく癢かゆにさわるので半ば意地になつて座っているのだ。

(…二日も休むなんて…大分悪いのかな…)

だが、頭の中は瑞貴のことばかり考えていた。

(…電話でも、してみようかな…)

ぼんやりとそんなことを匠は思う。だが、今更そんな事はとうてい出来そうもない様に匠には思えもした。

「でも、クヨクヨしてるくらいなら意地張らずにさつさと謝つちやつたら? 『雨降つて地固まる』になるといいけどね」

匠はゆうべ千夏が言った言葉を思い出す。確かに、喧嘩したことをクヨクヨ思い悩んでも仕方がないのも確かだ。

(…雨降つて地固まる、か…。明日は、来るよな…)

窓の方に目をやると、鉛色の雲が重苦しく立ちこめている。

同じ頃、パジャマの上にカーディガンを羽織つた瑞貴は自分の部屋のベットの上で上半身を起こし、窓の外を見つめていた。熱は上がったり下がったりで、今は解熱剤のおかげで下がってはいるが、まだ頭がぼんやりとしている。

(…二日目かあ…)

ぼんやりと枕許もとの時計を見た。ちょうど、午後の授業が始まる時間だ。

(…少しは勉強もしないとなあ…)

瑞貴は視線をそのまま机の上に持つていく。そこにはいくつかの

参考書が積まれてはいるがどれも真新しく、あまり使われてはいない。

（匠も、今頃は勉強してるのかな…）

そんなことをちらりと思うが、瑞貴は慌ててそれを打ち消す。瑞貴は匠を許せないでいた。匠に隆士と一緒にいる所など見られたくはなかったし、その事を言われたくもなかった。しかし、喧嘩の発端は瑞貴の不用意な言葉にあることもまた、分かっていた。

（…せめてそれだけでも謝んなくちゃね…）

ぼんやりとそんな事を思った時、また寒気を感じて瑞貴は身震いする。どうやら薬の効き目が切れてきたらしい。瑞貴はカーディガンをベットの縁にかけると、布団の中に潜り込んだ。

ここ数日、二人の待ち合わせ場所になっている駅の改札口で、隆士は瑞貴を待っていた。

（…渡瀬の奴…今日も遅いな…）

そろそろ四時になるうというのに、まだ瑞貴は姿を現さない。先ほどまでは瑞貴と同じ学校の生徒がかなり見られたのだが、今はほとんど姿を見かけなくなっている。

『また、逃げられた…？』

隆士の頭にちらりと嫌な言葉が浮かぶ。昨日は待ちぼうけだったのだ。慌ててその言葉を振り払うように、隆士は短い髪をかき上げ、それからタバコに火をつける。

（もう少し…待ってみるか…）

そう思いながらも隆士には何故か瑞貴がもう来ないような気がしていた。

（…電話番号でも聞いておけば…）

今更ながらに隆士はその後悔する。引越してもしたのか、隆士が昔知っていた電話番号は繋がらなくなっていたのだ。

（…みんな俺のせい、か…）

隆士は天を仰ぐように天井を見上げ、それから、ふう、と一つ溜

息をついた。

再び、雨

その翌日もまた、はつきりしない天気が続いていた。

（また休んじやったな…）

窓の外を見ながら瑞貴はぼんやりとそう思う。今朝は熱も下がって、かなり良くなつてはいるのだが、どうせだから大事をとつてもう一日休むことしたら、という母親の提案に素直に従ったのだ。ゆっくり気の済むまで寝ていられるし、めんどくさい授業を受けなくて済む。こんな提案なら大歓迎だった。

しかし、瑞貴にとって何よりもありがたかったのは匠と顔を合わせないで済む事だ。匠に対して謝る必要があることを認めながらも、瑞貴はなかなか気が進まないでいる。

（…何て謝ろうかな…）

いい加減眠るのにも飽きて、暇に飽かせて色々と謝り方を考えてはみるのだが、隆士との事を見られていた、というのが引っかかりなかなかきちんとした謝罪の言葉が浮かんでこない。

（そうよ、匠だって悪いんじゃない。何であたしだけ謝んなきゃならないのよ）

つい、瑞貴は開き直ってしまう。だが、それでは何も解決しないのだ。

（…後で、ちょっと電話してみようかな）

匠の電話番号は書いてあったろうかと、瑞貴は椅子の上に置いてある鞆を取り、その中から手帳を取る。確かに、瑞貴の手帳には匠の家の電話番号が書き込まれていた。

瑞貴は暫くその電話番号を見つめながら、匠と一緒に花火を見に行つた時のことを思い出す。

『…お前の事、…好きなんだ！』

思い詰めたような表情でそう言った匠。きつと、清水の舞台から飛び降りるような心境だったことだろう。あの時、瑞貴も匠の言わ

んとしている事を、分かっていた。だが、瑞貴には匠の気持ちに答えるだけの勇気がなかったのだ。

(…ずるいよね…あたし…)

心の中で瑞貴は匠に謝る。いつか、ちゃんと匠の気持ちに答えられる時が来るのだろうか。例え、どんな答えを出すにしても。

今の瑞貴にはまだその勇気がなかった。

不意に、飲んでいる風邪薬のせいか眠気が襲ってきた。

「ふぁ…」

小さくあくびをすると、瑞貴は布団に潜り込む。そして、いつの間にか眠ってしまった。

瑞貴は夢をみていた。

雨の中、制服姿の瑞貴と隆士は瑞貴のクリーム色の傘で相合い傘をして歩いている。今回は瑞貴が傘を持っていた。

暫く歩いたところに、紺色の傘をさした男子生徒が立っていた。何かを感じて瑞貴が立ち止まる。

「瑞貴」

不意に、男が傘を少し上に上げる。その男子生徒は匠だ。匠は、思い詰めたような、悲しげな表情をしている。

「さよなら…瑞貴…」

やがて、微かに匠がそう呟く。そして、瑞貴の反応を待たぬまま匠はかき消すように消えてしまった。

「匠!？」

匠に駆け寄ろうとした瑞貴がふと気がつくと、隣にいたはずの隆士もいつの間にかいなくなっており、瑞貴は降りしきる雨の中、一人ぼつんと佇んでいた。

傘に当たる雨の音はますます激しくなっている…。

「雨なんて…嫌い…」

目を覚ました瑞貴はそう呟く。外から、また雨の音が聞こえてきていた。

届かぬ想い

仏頂面で頼杖をついた匠は、黒板の前で若い女の先生が何かを話しているのをぼんやりと聞いている。何の授業かはもはや匠の興味から完全に外れていた。

（どうしたんだろ…）

今日何度目かの疑問が頭に上り、ちらりと右隣の席を見る。そこは、今日も空席のままだった。

（電話、してみようかな…）

三十分おきくらいに、匠はそう思う。だが、やはり決心が付かずにいた。今日は土曜なので、電話でもない限り瑞貴に会えるのは明後日という事になってしまふ。しかも、それも瑞貴が学校に来れば、の話である。

「…藤代君、聞いているの？」

「あ、は、はい？ …えー、代助は…」

不意に先生の声が脳に届き、匠は反射的に教科書を読み始める。

「…」

一瞬の沈黙の後、教室中が笑いの渦に包まれた。先生だけが、苦虫を百匹ぐらい噛み潰したような表情で匠を見ている。

「藤代君？ 今、何の時間が分かつてる？」

匠が黒板を見ると、そこには英語の文法の説明が書かれていた。

夕食後、瑞貴は思いきって匠の所へ電話をしてみることにした。月曜からは学校に行くつもりだったし、謝るにしてもクラスの人たちの目があるところでは謝りにくいからだ。瑞貴は電話の子機を手取る。

ふと思いついてみると、匠の家に電話をするのはこれが二度目だった。瑞貴は暫く子機のプッシュボタンと手帳に書かれている匠の家の電話番号を見比べていたが、やがて意を決したようにピピピッ

と一息に番号を押していく。

ゆっくり押していたら途中で手を止めてしまいそうだったのだ。

（お願い…すぐに…出て…）

「プーップーップーッ…」

だが、願いは届かなかったようで、無情な話し中の音が瑞貴の想いに答える。瑞貴はすぐに電話を切り、暫く子機を見つめていた。

降りしきる雨の中、一人ぼつんと佇む瑞貴。

不意に、昼間見た夢のワンシーンがフラッシュバックする。

「匠…ゴメン…」

暫く膝を抱えてぼんやりとしていた瑞貴は、そつと、そう呟いていた。

（よし、電話しよう！）

同じ頃、机に突っ伏して電話しようかどうかと逡巡していた匠はようやく意を決し、立ち上がる。だが、部屋を出た所でその決意は脆くも崩れ去ることになった。

「でね、今日さ…」

階段の下では、千夏が博文に電話をしていたのである。こうなると、千夏の電話はいつ終わるとも分からない。

気が付くと、匠は近くの公衆電話に向かって駆け出していた。あまり夜遅くには電話することは出来ないので時間がないのだ。しかも、最近あちこちで公衆電話の盗難が相次いでおり、ともに電話が残っているボックスは少ない。

（神様…もう一度だけ…）

匠は祈りながら走る。

だが、匠が知っている唯一のまともに機能しているはずの公衆電話は、修理中だった。匠は、その場にへたりこんだ。

そんな匠を、またしとすと降り始めた雨が濡らしていく。

そして、月曜日

そして、月曜日。

今日もまたはつきりしない天気が続いている。数日ぶりに学校に顔を出した瑞貴は、好奇の視線によって迎えられた。

「瑞貴、もう大丈夫なの？」

「え？ あ、うん。ホントは、土曜でも大丈夫だったんだけど、どうせだから連休にしちゃったんだ」

心配そうに尋ねる珠美に、瑞貴はぺろつと舌を出し、悪戯っぽく微笑んで答える。匠はまだ来ていなかった。

（謝らなきゃ…ね…）

空っぽの匠の机を見て、瑞貴はそう思う。

暫くすると、匠がやってきた。教室に入って来た匠は瑞貴がいるのを見て一瞬動作を止めたが、そのまま無視して自分の席に座る。瑞貴も、何となく声をかけられずに時折ちらちらと匠の方を窺^{うかが}うばかりだ。

「あの…」

二人が同時に声をかけ、見事に声が八モってしまふ。

「あ、ご、ゴメン…」

謝るのまで同時だった。顔を真っ赤にして俯いた二人はしばし沈黙してしまふ。

「ど、どうぞ、匠」

ややあつて、瑞貴がそう切り出す。

「い、いや、俺は、別に…」

俯いたままの匠がもごもごと口ごもった。

「…」

そのまま、沈黙が流れる。ふと気が付いてみると、周りじゅうが二人の様子に注目していた。

異様な緊張感が辺りに漂っている。

（こ、これじゃあ…）

もはや、何かを言えるような状況ではなかった。結局、時ばかりが無駄に過ぎ、やがて予鈴のチャイムによって第一라운드의終了が告げられた。

そして、そのまま謝る機会のないまま、放課後になってしまっていた。二人はその後、ロクに喋らずにいた。お互い、何となく相手の事を意識してしまい、普段みたいに気軽に話しかけられないのだ。その上、他の生徒達も二人のことに注目していて、周りの視線を感じて声をかけるのを止めてしまうことも何度もあった。

特に、最後の授業は体育だったため、着替えを終えた瑞貴が教室に戻った時にはもう既に男子の大半は帰った後だった。もちろん、匠もその例外ではない。

（…もう…何でさっさと帰っちゃうのよ…）

瑞貴はがらんとした教室で匠の席を見つめ、しばらく膨れていた。（ったく…匠の馬鹿…！ もう仲直りなんかしてやらないんだから！）

拗ねてしまった瑞貴は匠の机の脚を軽く蹴っ飛ばす。ガン、というくすんだ音が誰もいない教室に響き渡り、すぐにまた静かになった。

降りしきる雨の中、一人ぼつんと佇む瑞貴。

再び、夢のワンシーンがフラッシュバックする。急に不安に襲われた瑞貴は窓に駆け寄って外を眺めた。三階の教室の窓の外には相変わらず灰色の曇り空が広がっていた。校庭の方を見回してみると、何人かの生徒達がばらばらと歩いている。だが、その中に匠はいないようだった。

（何考えてるんだろ…いなくなるわけじゃない…）

瑞貴は一つ溜息をつく、鞆を持って教室を出る。しかし、教室を出ていくとも行かないうちに、珠美の緊張した声に呼び止められてしまう。

「瑞貴！ 匠君が、匠君が授業中に倒れて、保健室で寝かされてる

」！でっ

そして、月曜日（後書き）

いよいよエピソード込みであと2話です。

告白

独特の臭いのする保健室には、まだ眠ったままの匠と、瑞貴の他は誰もいなかった。窓ガラスには、古ぼけた蛍光灯に照らされた室内が映っている。その外に広がる空は、もう既に濃い藍色から墨色へとその装いおんぎを変えつつあった。

（何でそんな身体で学校なんか来るのよ…）

熱っぽい顔をして、苦しそうに眠ってる匠の顔を見ながら瑞貴は心の中でそう呟く。

弘樹の話によると、何だか赤い顔をしてふらふらしていた匠は、体育の時間、バスケットボールを受け損ない、そのまま倒れてしたたかに体育館の床に頭をぶつけたのだという。保健室に運ばれてから熱を計ると、四十度近かった。どうやら、風邪をひいていたようだ。

（…どうか…神様…）

瑞貴は目を閉じて祈っていた。

外は、雨が降っていた。

静まり返った隆士の部屋に、外の雨の音が微かに聞こえてきている。

「瑞貴…」

隆士のしなやかな手が瑞貴の頤おこがに伸び、くいつと優しく持ち上げる。瑞貴は内心の恐怖感を閉じこめるように、きゅっと目をつぶった。心臓の鼓動がうるさいくらい耳に響いている。

間近に迫った隆士の息づかいまでもが感じられ、座っている隆士のベットが微かに軋んだ。

（…）

目をつぶったまま息を潜め、その時を待つ。だが、いよいよという所で急に瑞貴は顔を逸らした。

「…瑞貴!？」

隆士が、非難と驚きの入り交じった声を上げる。

「ご、ごめんなさい…あたし、やっぱり…」

涙が出そうになるのをこらえながら、瑞貴はやっとの事で声を絞り出す。

「…何だよ、それ…お前、俺の事…」

傷ついた表情で隆士が非難する。

「ご、ごめ…先輩…」

涙を堪えて謝る瑞貴。だが、とうとう堪えきれなくなり、泣き出した。

「いいよ。分かった。帰れ」

吐き捨てるようにそう言うと隆士はそっぽを向く。

瑞貴は鞆を掴むと雨の中を泣きながら駆け出していく。クリーム色の傘は隆士の家の玄関に忘れたままだった。

「ごめんなさい…ごめんなさい…」

雨の中を泣きながら走る瑞貴はずっとそう呟き続けている。その後ろ姿を、今の瑞貴と匠が見つめていた。

「さよなら…」

悲しげにそう呟くと、くるりときびすを返し匠はどんどん先へ行ってしまう。

「待って!! 匠!! あたし…」

だが、瑞貴がいくら追いかけても、匠に追いつくことはできない。伸ばした手がむなく宙をつかむばかりだ。

「匠!! 匠…」

「…い…おい、瑞貴! どうしたんだよ!」

そこで、瑞貴は目を覚ました。どうやら布団に突っ伏して眠ってしまったようだ。側には布団から上半身を起こした匠が呆れ顔で瑞貴を見つめている。

「ったく、どうも寝苦しいと思ったら、お前が上に乗ってたのか」
そう言いながらぼりぼりと頭をかいていた匠の動きが、止まった。

瑞貴が震えながら泣いていたのである。

「瑞貴！？　お、おい、どうしたんだよ…」

「匠…」

泣きながら瑞貴は匠に抱きついていた。

「…な、何か怖い夢でも見たのか…？」

戸惑いながらも匠はそつと瑞貴を抱きしめる。甘いシャンプーの香りが、ふうわりと漂った。

そんな所に瑞貴もやっぱり女の子なんだな、と、匠は妙に納得してしまう。背は結構高いのに、華奢な体つきをしていてぎゅっと抱きしめたら折れてしまいそうだった。

「ばか…いなくなっちゃうかと思ったじゃない…」

「な、何言ってんだよ、そんな事ある訳ないだろ」

「うん…」

匠の胸に顔を埋めたまま、瑞貴は暫く泣いていた。匠は心の底から瑞貴のことを可愛いと思った。想いを、伝えたかった。

「瑞貴、俺…自分勝手かもしれないけど…」

暫くしゃくり上げる瑞貴の背中を見つめていた匠は、やがてそう切り出す。

「でも、言わないときつと後悔すると思うから…言っよ」

そこで一度口をつぐみ、何かを覚悟するように一つ深呼吸して続ける。

「俺…お前の事、好きだ。友達としてじゃなく、一人の女性として」
驚いて瑞貴は顔を上げた。

「匠…あたし…」

瑞貴が何かを言いかけ、つらそうに俯く。

「いいよ…分かってる。他に、いるんだろ…好きな人が…」
目を伏せた匠はそう応えた。暫く、沈黙が流れる。

「匠…あたしね…昔、付き合ってた人がいたの…」

暫く後、瑞貴がそう言った。

「…そう。匠がこの前見た人がその人…。でも、その人が…その人

が…」

「瑞貴…」

「聞いて、匠」

何かを言いかけた匠を瑞貴は遮るが、さっきの夢がちらりと瑞貴の脳裏をよぎり、一瞬躊躇してしまふ。だが結局、瑞貴は全てを話すことにした。正直に自分の気持ちを伝えてくれた匠に応えるにはそれしかないように思えたからだった。

「…その人が、キスしようとした時…逃げ出しちゃったんだ…怖くて…」

瑞貴はまた肩をふるわせて泣いていた。

「…それ以来ずっと…怖かった…。人を…好きになる事も…恋人として誰かと付き合う事も…」

そこで瑞貴は一息ついた。それから、一つ深呼吸して、今度ははにかんだように明るく続ける。

「でも、今度ね、また、付き合ってもいいかなっていう人が、出来たの」

「そう…」

匠はつらそうに俯く。予想していた答えだった。せめて、笑顔で送り出してやろうと思ったのに…。匠は、そうできない自分が、悔しかった。

「匠？」

俯いてそっぽを向いてしまった匠を見て、瑞貴が怪訝そうな顔をする。

「ゴメン、ちゃんと、送り出してやろうと思ったのに…俺…」

どうやら、匠にははっきり言わなければダメらしい。瑞貴は呆れる思いだった。

「匠、こっち向いて」

「な、何だ…」

不意の命令口調に振り向いた匠の唇に、柔らかな感触が触れる。同時に、ふうわりと甘いシャンプーの香りが漂った。

「…」

「匠…あたしは、匠の事が…」

目を白黒させる匠から唇を離した瑞貴が何かを言いかけた時だった。

ガラッ！

いきなり、勢いよくドアが開き、千夏が入ってくる。そして、いっせいに雰囲気になっていく匠と瑞貴を見て、素っ頓狂な声を上げた。

「あーっ！！ お兄ちゃんっ！ 一体何やってるのよっ！！」

告白（後書き）

次はエピソードです。お付き合いありがとうございます。

エピソード―雨上がりの風に向かって―

その翌日、匠は学校を休んだ。鬱陶^{うつとう}しい雨が相変わらず降っていたが、夕方頃にはどうにか止んでいた。

放課後、瑞貴は駅へ向かう。気は重かったが、このままにする訳にはいかない。それに、そうする事によって自分にもけじめを付けたかった。

駅に着いた瑞貴は、隆士の姿を探す。案の定、隆士はいつもの場所^{ところ}にいた。

「あ、何日も人に待ちぼうけ食わせやがって。どうしたんだよ。また逃げたのかと思っただろ」

瑞貴を見つけた隆士が笑いながら声をかける。「また逃げた」と言う言葉が、痛かった。

（そう…あたし…ずっと逃げてたんだ…あの時から…）

「瑞貴？」

俯いて黙ってしまった瑞貴に、怪訝^{けつぜん}そうな顔で隆士が呼びかける。

「先輩…ごめんなさい…」

一つ深呼吸した瑞貴は、そう切り出す。隆士の笑顔が、凍り付いた。

「…もう、お付き合いできません…」

暫く、二人とも黙ったままだった。通り過ぎる人々が、まるで絶えることのない時の流れのようで、その流れから取り残されてしまった二人の周りを足早に過ぎていく。

「…分かった」

やがて、溜息をつき、たった一言そう呟くと隆士は髪をかき上げるような仕草をした。そして、くるりときびすを返すと、そのまま振り返ることもなく改札をくぐり、人混みに紛^{まぎ}れて見えなくなっていく。

（さよなら…先輩…）

その後ろ姿を見送っていた瑞貴は心の中でそつと呟く。それから一つ溜息をつき、駅を出た。少し、歩きたかったのだ。

瑞貴が空を見上げると、厚い雲の切れ間から茜色の夕日が覗いていた。そして、その光が周りの雲を同じ色に染めている。

明日は、晴れるだろうか。

不意にそんな疑問が頭をよぎる。それから、急に可笑しくなつてクスリと笑った。

（きっと、晴れるよね）

瑞貴は、千夏に『我が兄ながら情けない』などと小言を言われながら帰っていった匠の事を思い浮かべる。

「……」

ふと、そう呟いていた自分に気付き、瑞貴ははにかんだように笑った。それから、雨上がりの風に向かって、しっかりとした足取りで歩き出す。

少し、肌寒くはあったけれども。

終

エピソードぐゝ雨上がりの風に向かってゝ（後書き）

最後までお付き合いいただきありがとうございました。

実のところ作品そのものとしてはセピアの第三話に次ぐ古さ、1998年作です（汗）。そういつた書きためていた話もそろそろ底をついてきた事ですし、そろそろ新作も発表したいなあと思っています。

そんな気持ちになりましたのも皆様のアクセスや感想のおかげです。ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442i/>

三/年/目2 雨上がりの風に向かって

2010年10月8日15時26分発行